

新作能『たたかわざる者—H・ソローとR・H・ブライズ—』から
創作能『ブライス先生—たたかわざる者R・H・ブライスとH・ソロー—』へ

From Men Who Would Not Fight—H. Thoreau and R.H. Blyth—
to Blyth-Sensei—R.H. Blyth and H. Thoreau—

岡本 靖正

OKAMOTO Yasumasa

Abstract: The revised version of MUNAKATA Kuniyoshi's new Noh play *Men Who Would Not Fight: Henry Thoreau and R. H. Blyth*, was performed by TSUMURA Reijiro as *shite* at the National Noh Theatre in Tokyo on the 18th of November 2020. The title was also revised as *Blyth-Sensei—Men Who Would Not Fight: R. H. Blyth and Henry Thoreau*—. The original main and sub-titles are exchanged, with the posthumous Buddhist name given to Blyth by SUZUKI Daisetsu as the new main title, and the name of Blyth is placed first in the subtitle.

The most obvious changes are (1) that MATSUO Basho's four well-known haiku poems are newly woven into the text, and (2) that a Myoan school *shakuhachi* player (NAKAMURA Akikazu) is added to the musicians.

The revised version begins with chorus singing “*Konomichiya yuku hitonashini akinokure*,” and in the latter half Blyth's spirit (TSUMURA Reijiro) appears, as if invoked by the *shakuhachi* playing, singing “*Araumiya Sadoniyokotou amanogawa*.” The spirit's dance, while singing with the Chorus “*Tsukihiwa hakutaino kakakunishite yukikootoshimo tabibitonari*,” and in solo “*Tabiniyande yumewa karenoo kakemeguru*,” has become far graver and longer than in the original version, accompanied by *shakuhachi*, the player of which plays, standing and moving to and on the *hashigakari* walkway. The spirit sings another Basho poem before he disappears, “*Furukeya kawazu tobikomu mizunotoo*,” also accompanied by *shakuhachi*.

In the original version the assertion of antiwar and nonviolence seemed to be a little too straightforward. The revised version, in which Blyth, Basho, and Zen (Daisetsu) are foregrounded, has become more compact and more polished textually, musically and thematically.

Keywords: 新作能、創作能、不來子先生、宗片邦義、津村禮次郎、R.H. ブライス、H. ソロー、鈴木大拙、行方克巳、松尾芭蕉、俳句、『奥の細道』、中村明一、明暗流（虚無僧）尺八、非戦、非暴力。

New Noh play, creative Noh play, Blyth-Sensei, MUNAKATA Kuniyoshi, TSUMURA Reijiro, R.H. Blyth, Henry Thoreau, SUZUKI Daisetsu, NAMEKATA Katsumi, MATSUO Basho, haiku, *Okunohosomichi*, NAKAMURA Akikazu, *Myoan* school (komusou) *shakuhachi*, antiwar, nonviolence.

昨 2019 年 3 月 24 日（日）に観世能楽堂で初演され、本年 4 月 18 日（土）に再演されるはずが、コロナ禍のために延期されていた宗片邦義原作・津村禮次郎作能『不來子先生』の上演が、半年余り遅れて、11 月 18 日（水）に国立能楽堂で実現した。

新作能はだいぶ変更を加えられている。

まずタイトル。非戦・非暴力のテーマがいささかあらわに過ぎた本題が副題に後退し、副題の R. H. Blyth と H. Thoreau の順序が入れ替わり、前者の鈴木大拙による戒名が本題とされている。これは納得のゆく変更で、将来は『不來子先生』^{ブライセンセイ}だけの作品名になる可能性もありそうである。

それから Blyth のカタカナ表記が「ブライズ」から「ブライス」に変わっている。適切な変更である。手許にある *BBC Pronouncing Dictionary of British Names*, edited and transcribed by G. E. Pointon (Oxford University Press, 1983) でも、大塚高信・寿岳文章・菊野六夫 共編『固有名詞英語発音辞典』（三省堂、1969）でも、Blythe の末尾が有声音であるのに対して、Blyth の末尾は無声音である。

テキスト上の最も明瞭な変更は、行方克巳助言による芭蕉の四つの句が詞章に組み入れられたことである。

冒頭、囃子方と地謡が座につくと、曲は地謡による「この道や 行く人なしに 秋の暮^{くれ} 行く人なしに秋の暮」に始まり、後半、ブライスの霊（津村禮次郎）は「荒海や 佐渡に横たふ^{よこたふ}天の川^{がわ}」と謡って登場する。

『奥の細道』の「月日は百代の過客^{つきひ はくたい かかく}にして。行かふ年^{ゆき こ}も旅人^{たびびと}也」は、新作能でも、ブ霊が謡い、地によって繰り返されていたが、今回の創作能ではさらに、尺八に乗ってブ霊の長い「舞イロエ風、立廻り」があったのち、ブ霊「旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る」が加えられ、そのあと尺八の演奏が続く中で、ブ霊「古池^{ふるいけ}や 蛙^{かき} 飛び込む 水の音」が謡われている。

新才能で「カット可」とされていた部分（3 箇所）は削除され、ブライスが「熱愛」したパッハに関する詞章も削られている。内容上重複していた部分も整理され、同じ詞章も位置を前後に変えられて、てにをはに至るまで細かい修正が施され、全体としてすっきりと無駄のない、引き締まったテキストになっている。

ブライスに焦点を合わせるように、ソローが後退し、新才能で 20 箇所あったハーディング教授の言葉が 17 箇所になり、演能上も学生の存在感が増している。

新才能では、学生が先に登場し（「私はブライス教授の元で学びました学生ですが、今日はあのお方をお待ち致しております。」）、そこに教授が登場して名告り、対話となっていたが、創才能は、教授（永島充）の登場で始まり（上記の学生の言葉は削除）、その限りでは教授が重視されているようにも見えるが、たぶん（と言うのも、記憶が必ずしも定かではないからだ）学生（長谷川晴彦）の登場の仕方／動きとともに、曲付け上、学生の謡いが重厚になっている。

最もめざましい変更は、明暗流尺八の中村明一氏の演奏が加わっていることである。

それも囃子方の座についての演奏ではなく、学生が教授をブライスの墓所に案内して、墓碑の「不來子古道照心居士」の意味を説明し、地が「師の大拙は。かく戒名を付けられ …（新才能：かの大拙。）」と謡うところに、[尺八、切り戸より入り地謡前にて演奏]、その嫋々として、また枯れた、演奏に呼び出されるように、その間に一の松に運び出されていた作り物から、ブライスの霊が「荒海や 佐渡に横たふ天の川」と謡いつつ登場する。

尺八は、演奏が終わると切り戸から一旦退場するが、教授とブ霊のソローをめぐる問答ののち、ブ霊「ソローが真に偉大なるは。文学社会政治批評の正しさにあるにあらず 地「この世の真の大事を覚ゆるなり。われらが足下に大地あり。われらが頭上に天空あり。人は宇宙・大自然の中にあり」と謡うところに再び登場し、その演奏に乗ってシテが舞う。

ブ霊「ソローと共なれば。天空と共にあり

地「超絶にして現実

ブ霊「思いのまま吹く風の如

地「遠くにありて近くにあり

（中略）

地「かくてブライス結論す。神が最後の審判に。ソローこそ真の人間と。日本
本の最も偉大なる詩人。松尾芭蕉に比さるべし

ブ霊「『奥の細道』の冒頭に。月日は百代の過客にして。行かふ年も旅人也

地「月日は百代の過客にして。行かふ年も旅人なり

【尺八、橋掛かり、立奏】

【ブ霊の舞イロエ風、立廻り】

ブ霊「旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る」

新たに加えられた芭蕉の句を吟じつつブ霊が舞うこの舞が一曲のクライマックスである。
感銘深い舞であった。

そのあとさらに

霊「^{ふるいけ}古池や ♪ ^{かわず}蛙 ♪ 飛び込む ♪ 水の音 ♪
古池とは何ぞや ♪ 蛙とは何者ぞ ♪」

【尺八演奏続】くなか、ブライスの霊は尺八の演奏に送られて消え、尺八も【演奏しながら幕に入る】。

曲は、地謡が直前のブ霊のソローへの言及を承けて「その生涯を一篇の。詩に創らんと生き抜きて。共にこれを言葉もて。書き記さんは難かりし」を変奏しつつ繰り返すうちに終わる。

総じて、ブライス、芭蕉、禅（大拙）が焦点化されるように改訂され、能として練り上げられていると感じられた。